

令和6年度第1回京都市図書館協議会摘録

○日 時：令和6年11月18日（月）午前10時00分～12時

○場 所：京都市生涯学習総合センター 3階第4研修室

○出席委員：〔9名中7名出席〕

石田 大輔 委員
岩崎 れい 委員
梶川 敏夫 委員
後藤由美子 委員
澤田 瞳子 委員
西 健児 委員
廣瀬 千景 委員（五十音順）

○欠席委員：2名

○傍 聴 者：0名

1 開会

（1）中央図書館長の挨拶

図書館協議会は法的に設置することが決まっている。この会議以外には外部の方からの意見を聞くことがない。非常に大事な会議だと認識している。どうすれば本来の図書館機能をキープしながら改善されていくかということは大変な難問だと思う。本日は、いろいろな御意見を賜りたい。

2 協議事項

協議事項である「図書館のこれからを考える」について、事務局から以下の事項を説明した。

公明党の中村まり議員から9月市会での代表質問で図書館についての質問があった。

「これからの公共施設のあり方として、図書館が1つの居場所となるよう、多様な世代の方が行きたくなる、わくわくする魅力ある場所に、また新たなつながりや価値が生まれる場所になる等、図書館の役割や機能を再考していただきたいと考えますがいかがでしょうか。」と、質問があった。

その回答として、「中村まり議員ご指摘の通り、公共施設の戦略的活用の最たるものが図書館の活用ということだと思っております。一方で、中村議員ご指摘の通り、今日の図書館は、単に本を借りるだけに留まらない、例えばカフェのような市民交流の場や子どもたちが声を出し、自由に遊ぶ遊具などを備えた空間、ビジネスミーティングが行える場などの複合的な機能を有した図書館、さらには地域の特色を生かした個性あふれる図書館など、自宅や職場、学校以外の居心地のよい第三の居場所、いわゆる「サードプレイス」としての機能が求められていると認識しております。

さらには、図書館の再編はもとより、他の公共施設機能との複合化も視野に入れ、図書館機能を核とした「賑わい」と「交流」の場や、市民にとって新たな価値観に出会える「地域コミュニティの核」となる場の創出も重要な観点であると認識しております。

施設の老朽化や面積の狭さなどの課題はございますが、この課題は裏返せば、新しい可能

性につながるものと思っています。

また、図書館機能の多面的な活用、あるいは従来の「狭い図書館」という概念に捉われない、多面的な施設をいかに作っていくかということは、極めて重要なことだと思っております。

京都のまちの更なる活性化に資するよう、図書館利用者だけでなく、幅広い市民の皆様の潜在的なニーズを把握したうえで、図書館サービスの拡充はもとより、多様な世代が集い、滞在し、交流する中で、新たな価値創造につながる、そして包摂的な社会の形成につながる、これからの図書館の在り方について積極的に検討してまいります。」という答弁があった。

松井市長も就任当時から図書館に高い関心を持っており、改めてこれからの図書館の在り方について、課題も含めて幅広くご意見をいただきたい。

3 (1) 協議事項「京都市図書館の課題」に関する意見

意見 普段利用している図書館は狭い上、読書会などを行う場所もない。5月28日に京都新聞に「上京区に図書館がないのはなぜ？」という読者からの質問に答える記事があった。その回答として、「中期計画に基づいて各区に図書館を作ってきたが、中央図書館は上京区と中京区の地域館を兼ねている」ということだった。この質問は他府県からこられた方の質問であり、京都市民としては少し悔しい気もした。私たちもこれで満足しているわけではない。中期計画は1984年に作られたもので、それに沿って作られた図書館という回答だけでは良くないと思った。もう一度、自分の使っている図書館が今のままでいいのか考えて、何かしらの動きを作りたいと思う。大きな動きはできないかもしれないが小さな要望でも重ねていきたい。

また、近隣の他府県にも大きな図書館が次々と建っている。「こんな図書館ができればいいなあ」という声も聴く。運営の仕方がどのようになっているか確認する必要があるが、他都市のような天井の高い広々した、イベントもできるような、しっかりした司書のいる図書館が作れたらと思う。

1番感じていることは、京都市図書館がスタートする時点で、財団委託の図書館になったこと。これについて、当初文庫連絡会は反対運動をしたが、残念ながら財団に委託することになった。そのためにうまくいかないことが多かった。しかし40年以上運営される間には、さまざまな工夫や努力で公共図書館としての働きを果たしていると感じている。他府県の新たな民間業者の指定管理を受けた運営の色々な問題も、今後どのような様子なのか見ていく必要がある。

意見 図書館によく本を借りに行くが、1番望んでいることは、読みたいと思う本があれば良いと思っている。年間に何万冊も毎年発行されるので、すべての本がないことは理解できるが、同じ本が10冊ほどある本もあれば、まったくない本もある。そういったアンバランスなところを改善してほしい。以前に書籍を寄付したが、未だに検索しても出てこない。良い本、悪い本に関わらず1冊もない本が寄付されたら図書館に並べてほしいと思う。本の種類の豊富さを追求してもらいたい。

カフェを併設した図書館などもあるが、図書館の武器は本だと思うので、本の種類を揃えてほしい。

また、スマートフォンで本を予約して取りに行くことが多いので、図書館に本が並んでいることを望んでいるのではなく、図書館の中は開放感のある図書館にしてほし

い。

1つだけ改善してほしい点として、中央図書館へ来るには車を使用するが、本を返すだけの5分10分は駐車場を無料にしてほしい。また、石川県の図書館では本の帯も一緒に挟んでくれているが、京都も是非同じように帯を挟んでほしい。

意見 京都市は図書館が20館あり、全部があまり広くないという問題はどのようにもない。私自身は、京都府立図書館をよく使用する。専門書が多数あるので、よく利用している。

1つは大きな図書館が必要。以前は京都市の考古資料館にいたが、その時に、お客様がきてもすぐに満員になってしまうという施設を持っていた。京都市に大きな博物館を造る委員もしていたが、経済的な問題で頓挫したまま。小さな図書館があることも必要だが、やはり大きな図書館が1つ必要。大きな図書館を造ることによって、図書館の魅力が増して、他の小さな図書館にも波及効果でよくなっていくと思う。そのためには、寄付を集めたりすることも考える必要がある。

意見 まずハードについての話になるが、新しい図書館に建替えること、その他のことについて実現の可能性はどの程度なのか。実現するのであれば具体的に考えて動いていく必要がある。20年後、30年後の話となるのであれば、今回の話を受けて、目指していく間に図書館文化は衰退していく。狭いという問題がどの程度解消される可能性があるのかという前提で話を進めていけたらと思う。

貸出数が減っているという議論があるが、児童貸出数は横ばいである。子どもたちの数が減っている現状を考えると、横ばいが続いているということはいい傾向だと思っている。様々な図書館で話をしても、中学生や高校生、大学生の利用は下がる。その世代に対する図書館の利用に関しては、読書文化や読む力を追求することだと思う。もちろん、図書館の利用状況や、図書館をどうするのかという議論と、読むこと、書くことを含んだ国語教育などと密接に関わりを持っていければいいと思っている。

最近では「税金で買った本」というコミックが話題になっている。今、仕事の漫画や仕事の小説が若い世代で非常に流行っている。やはり、図書館というものがまだまだ一般的には知られていないということがわかった。テレビでも「図書館」を題材にしたものは視聴率がいいと聞く。まだまだ図書館の可能性を知ってもらうことができる。普及活動が続けているとは思いますが、今までとは違う視点から広げることも必要。京都市は潜在的文化が非常に高い。学生は、大学図書館は非常に身近だから使用するが、地元の図書館を利用するかといった少し距離が離れているので利用しないとなる。そういった部分でも普及活動をしていく必要があると感じている。

回答 図書館整備の可能性として、京都市は図書館を20館設置しており、全ての図書館を一斉に新しくすることは難しい。他の施設でも言えることだが、築45年～50年までの間に長寿命化の対策をするか、新しい建物にするのか判断が必要となる。今の図書館も検討する年数になっている図書館がある。大きな図書館となると、基本構想、基本設計、実施設計と考えていくと早くても10年程度かかる。基本的な考え方がまとまっていけば、新築していく方向性もあると考えている。

意見 小学校の課題として挙がっているのは、国語の教科書には図書館の活用の仕方のようなものが各学年の発達段階に応じて書かれている。それを元に担任の先生が学校の図書室の活用を進めていくことはできるが、公共図書館の活用を進めるまでには課題がある。子どもたちがもっと本を読みたくなるような指導をしていくことが1番だが、

実際に足を運ばせるとなると厳しい。本校の小学校では校区内に公共図書館がない。隣の校区には図書館があるので、今後、校区を跨ぐが授業の一環として公共図書館に行く取組を進めていこうと考えている。

吉祥院図書館では、こども読書の日の活動や、読書週間記念事業の取組もされているが、そういったものを実際に体感する機会が子どもたちにはなかなかない。

また、小学生は校区外に行くには保護者と一緒に出る必要があるので、まずは学校が働きかけて、子どもに図書館への興味を持ってもらう。また、保護者の方々にも啓発していくことを進めている。

その中で課題を解決していき、少しでも学校が協力して図書館に足を運ばせることができないかと考えている。保護者も図書館に行った時に交流の場となるような図書館になれば良いと思っている。

学校としては、図書館の発行物なども電子化して保護者に配信するシステムがあるので、公共図書館からもらった情報やデータを保護者にも啓発していきたい。

意見 小学生は校区外に行くときは親と一緒にというルールがある。保護者の方も仕事があるので一緒に行くことが難しいことが多い。上京区だと中学生であっても上京区に図書館がないので、大垣書店のカフェなどで本を読んでいる状況もある。私は施設で働いているが、高齢者の方はすごく本を読まれる。図書館で本を借りて施設に持っていくとすごく喜ばれる。その中でも絵本に興味を持たれる方が多いので、高齢者が行きやすい施設を作っていただきたい。

3 (2) 協議事項「今後の図書館のあり方」に関する意見

意見 京都市の図書館は狭く、書庫もスペースが少ないので、寄贈された本もなかなか保管できない。毎月発行される子ども雑誌でも、残してほしいと思っているが保存できない。また、読書会や講演会をしたいと思っても会議室のようなものもないので、図書館としてもやりたい仕事ができないと思う。また、児童サービスで思っていることは、昔、府立図書館には小さいが居心地の良い児童室があり、児童書専門の司書もいて児童サービスをしっかりされていたが、阪神淡路大震災で府立図書館が一部損壊し修復したときを契機に、児童サービスをやめた。そこで、府内市町村の図書館の支援をする形に変わり、府立図書館で児童書専門の司書が児童に直接サービスをするとはなくなった。

子どもの行ける図書館ではなくなり、府内市町村図書館員への児童サービスの研修もなくなった。そういった点を考えると京都市図書館が児童サービスを担っていかなければならない。

是非、大きな新中央図書館を建てて、保存できる書庫も確保し、お話会、読書会のような行事も開けるようなスペースも備えたい。そこから規模の小さい地域館も支援していけば活性化すると思う。

意見 小学校では1人1台タブレット端末を持っている。授業の一環で図書館の本を借りて、小学校限定で借りた本を図書館が持ってくるようなことができればと思った。

意見 1人1台端末では、学校の図書館に置かれている本を検索できるようにはなっているが、そのまま貸出でいるようにはなっていない。公共図書館とも紐づけされていれば公共図書館にある本を検索することはできる。

回答 小学生が図書館カードを登録して所持していれば、タブレット端末からでも予約す

ることは可能だと思うが、小学生が図書館カードを持っていることが大前提になる。

京都市としても検討を重ねたが、全校生徒に図書カードを配布するとなると、学校がその図書館カードの ID とパスワードを管理することになる。そうすると教員の負担がとて大きくなるので難しい問題となっている。

また、タブレット端末にアプリを入れることも検討したが、アプリを作って運用していくと莫大な経費が必要となるので、実現できていないのが現状。

意見 以前に学校の図書館を視察させていただいたが、学校図書館の司書の方が様々なことを試しておられた。学校図書館は非常に貸出冊数も多く読書意識が高いと言っていたが、公共図書館とのつながりがまだできていないと言っていた。公共図書館の存在を伝えるということは、中学生や高校生になった時や、学校図書館から離れた時に、生涯の知識を得ることになるので、是非進めてもらいたい。

やはり、図書室ではなく図書館の方がたくさんの本が並んでいる。今はインターネットの時代だが、リアルの本屋や図書館だとたくさんの本が並んでいる。自分で調べたいことをインターネットで検索してアクセスすることもできるが、本が並んでいると隣の本を見ることもあり自分の知る可能性を広げることができる。是非、リアルな図書館にアクセスしていく方法を模索してほしい。

大きな図書館が必要という意見があるが、京都の場合は住宅地の真ん中に小さな図書館があって、生活と図書館が密着して溶け込んでいるところに図書館が複数あるということが魅力である。ただし、小さいがゆえに他の地域の方が気づかないということがメリットでもありデメリットでもある。大きな図書館と小さな図書館があればいい。仕事で地方の図書館に行くことが多いが、駅前に大きな図書館があるところがあるが、京都とは事情が違う。車で来れる大人たちしか来ない図書館になる。歩いて行けるとところに小さな図書館があるということが京都の魅力でもある。大きな図書館があると便利ではあるが、是非小さな図書館と併用できるようにしてほしい。

また、町の本屋が減り、本屋の利用者が減っているということで、カフェを併設したりイベントスペースを作ったり、図書館や本屋もいろいろ模索しているが、そうすると古くからの利用者は離れてしまう。カフェスペースがあれば本屋に来るかという本が汚れてしまったりする可能性もある。古くからの利用者が離れてしまい、新しいカフェを利用しに来た人が、今後ずっと本屋を利用するかということとはわからない。その時の一過性になってしまうデメリットが最近浮き彫りになっていきている。新しい図書館の可能性を模索する上で、学ぶということをおろそかにしない議論をしてほしい。

回答 京都市図書館の整備の基本的な考え方は半径 2 km 圏内、徒歩 30 分圏内に図書館を設置している。上京図書館がないという新聞記事もあったが各行政区に 1 つの図書館があるわけではない。地域密着型で、徒歩、もしくは自転車で通える距離に図書館を設置する形で整備している。政令指定都市を見ても 20 館設置している都市は少なく地域に密着した展開ができているのは京都市の強みだと思っている。

公共図書館に触れるという話では、小学校では「まち探検」の取組で、その地域の図書館に行ってみるということも実施されている。ある図書館では、それまで一度も来たことがなかった小学生も、その取組を機に図書館に足を運んでくれる子どもたちもいるようで、非常に重要な取組だと感じている。

意見 私が住んでいる小さな市では、市が主催するイベント情報がラインで送られてくる

ようにしている。そうすると自分でアクセスしていった定期的にいろいろなイベントを確認することができる。図書館もそういったことを工夫することもあると思う。

やはりネットの時代となり、孫を見ていると図書館に行くような気配は全くない。ネットにかなりの時間を割り振っている。先程意見もあったように、できるだけ図書館に足を運ぶということを重点的に取り組んでいくべきだと思う。

小さい図書館でどうしても置きたい本があっても置くスペースがない場合はどのような工夫をされているのか。

回答 京都市では移動図書館を含めて21館あるが、全館ネットワークでつながっているため、近い図書館に本がなくても、他の図書館にあればネットから取寄せすることが可能。京都市図書館にない本についても、京都府下を検索して、府下にあれば相互貸借という制度を利用して無料で提供することは可能。府下になれば日本全国探すことも可能。しかし提供するために送料がかかる場合もある。

意見 先程の意見にもあったように、自分が探しているものと、その隣に本があるとついで見えて面白かったと思うことがある。その状況をつくるためにもスペースがないと実現できない。そこに対しての工夫はあるのか。

回答 京都市としても現物の本を手にとってもらいたいという思いはある。例えばテーマを決めて、テーマに沿った本を貸出カウンター付近に置いたりして、視覚的にもとらえてもらえるように工夫している。

回答 年間1万冊程度の本が寄贈図書として入ってきている。すべてを手にしなくても、入れることができるスペースが必要。書架も狭いということもあるので、本をセレクトして、リクエストにも応じていく。除籍をする場合はどの本を残すのかを職員の複数の目で確認して見極めている。現状では新しい本を入れれば入れるほど除籍もする必要がある。

質問 現在の大きな課題として、配架を増やした方がいいのか、書架を減らして天井を高くみせて居心地のいい空間をつくるのでは、どちらがいいのかご意見をいただきたい。

意見 居心地の良さについては、その対象者のニーズにどう応えていくのかということになる。どのニーズに応えるのかをとらえていく必要がある。小学生の子どもが図書館によく行っている子どもがいるが、それはサードプレイスとして心の居場所として行っている子どももいるし、本が好きで本を見つけに行ってる子どももいる。どちらを選択するのかはなかなか決めきれないところはある。

小学生は保護者と同伴でないといけない状況もあるが、それを克服することが必要だと感じる。また、中高生が公共図書館に行けていないと思う。

公共図書館の取組を見ていると、ある中学校では、図書委員の子どもがおすすめの本のポップを作って展示していたり、ボランティア活動や職場体験で図書館に行っていることもある。そうすることで身近なものとして捉えるように取組をされているが、実際に中高生がどのような目的で図書館に行きたがるのか、知っていたら教えてもらいたい。

回答 データで見ると中高生の利用が非常に少ない状態で、学校の図書室には行ってるかも知れないが、公共図書館には来れない中高生は多いと感じている。原因はアンケートなどをして把握する必要があるが、図書館で自習できないというのが1つの大きな課題だと感じている。

意見 中高生の自習については、彼らは忙しいということと、学校の図書室だと勉強がで

きてついでに本が手に取れる。自習の場所を選ぶ時に公共図書館では注意されるという気持ち、少し怖いという気持ちを抱いてしまう世代が多いように思う。以前、左京区にある私設図書館の自習室で一時期働いていたが、中高生はたくさん来ていた。少しだけ本を置いていたが、勉強の間に興味を持った子たちが本を手にとって見ていた。中高生は忙しいので、自習がきっかけとして図書館が使われ、そこから本来の本を読むということにフィードバックしていくことも必要だと思う。若い世代に広がりを持たせるためにも、少なくとも自習スペースがあるといいと思う。

意見 よく利用する右京中央図書館にはかなり広いティーンズコーナーがある。そのコーナーは充実していて、よく借りられているようだ。また学術的な京都大百科コーナーの横に、「京都の本コーナー」がある。漫画全巻から小説、歴史書まで実にたくさんあり、ゆっくりそこで読める。そういう取組が若い世代をも呼ぶのではないか、これもスペースあってこそだが。

意見 図書館でニーズを把握することが必要だと思う。どの世代を中心に考えるかが重要。本が好きな子は、小さい時から親に本を読んでもらったりしている。その若い親が行きやすいような環境を作ることが必要だと思う。

自分の子どもは部活動をしているため、部活が終わる頃には図書館が閉まっているのでなかなか行く機会がないということもある。

また、図書館がどこにあるのかわからない子どもたちもいると思うので、SNSを利用して発信していくことも必要だと思う。

高校生では、やはり自習室が欲しいという声もあった。

(岩崎委員長より、海外の図書館の写真をしながら説明)

意見 海外の事例だと、そのまま日本で取り入れることができないものもあるが、行政として何をしていくべきなのかといったことを考えていければと思う。

皆様から色々なご意見ご提案をいただいたので、検討いただきたい。

4 事務連絡

5 閉会